

日本語の談話におけるポーズ研究

—音響音声学的・日本語教育学的見地から—

萩原めぐみ

本稿は、日本語学習者が、聴取者である母語話者にとって聞きやすいと感じる談話が生
成できるようになるためにはどうすればいいかを研究したものである。主に、以下の3点
を解明することを目的に研究を行った。

<目的>

1. 日本語学習者が、日本語母語話者にとって聞きやすい談話(スピーチ、プレゼン
テーション、インタビュー)を生成するための指標として、それぞれの「ポーズの規
範」を作成すること。そして規範に基づいた指導効果を検証すること。
2. 談話場面(スピーチ、プレゼンテーション、インタビュー)によって、ポーズの出現
位置、時間長に差があるか、あるならどう異なるかを明らかにすること。
3. ポーズの出現位置と枝分かれ構造、および各文節の意味的役割との関係を探るこ
と。

まず、第1章・序論の前半部分では韻律論におけるポーズの位置付けを述べた。韻律は
ポーズのみならずアクセント、イントネーション、速さ、リズムなどの複数の要素が相互
に影響をして構成されている。そしてそれらは決して単体で変動するのではなく、常に他
の要素と連動している。この特徴を考えると、ある一つの要素に注目し、それを聞きやす
くすれば、他の韻律構成要素もプラスの方向に動くのではないかという仮説を述べた。次
に、序論の後半部では談話論におけるスピーチ、プレゼンテーション、インタビューの
位置付けについて先行研究を概観しながら、資料選定の理由と、「独話」ではなく「談話」
として扱うべきであることを主張した。それは、今回扱った3種類の資料はある一定時間、
一人の人間が語るという意味において独話ととらえられるかもしれないが、そこには常に
観客やインタビュアーを意識して語られるものであるため、「談話」として扱うべきだ
という筆者の考えを述べた。

第2章～第4章は、上述<目的1>の解明のために研究を行った。

まず、第2章では、母語話者に「聞きやすいスピーチ」と評価された音声のポーズの
特徴を探った。本稿は最終的に日本語教育への寄与と貢献を目指すため、資料は母語話者
のみならず、日本語学習者のものも使った。その結果、

- 1.右枝分かれ境界ではポーズが出現しやすい。但し、①直前の発話節も右枝分かれ境界、②直後の発話節も右枝分かれ境界の時はポーズが出現しないこともある。
- 2.文末には非常に長いポーズが出現する。
- 3.左枝分かれ境界ではポーズが出現しにくい。但し、①フォーカス語の前、②引用の「と」の前、③発話節が長い、④述語的成分¹で終わる発話節の時は、ポーズが出現することもある。

ということが示唆された。

第3章では、第2章と同様の方法で「聞きにくいスピーチ」だと評価されたポーズの特徴を探った。その結果、

- 1.右枝分かれ境界であるにもかかわらず、ポーズが出現していない箇所が多い。
- 2.枝分かれ構造に関連した語類の属性を視点に分析すると、聞きやすいスピーチに比べて、文末、接続詞、接続助詞の後、係助詞「は」の後のポーズの時間長が短い、あるいは接続詞の後にはポーズが出現していない。これは聞きやすいスピーチとは異なる特徴である。
- 3.ポーズの頻度が少ないにも関わらず「回数が多い」というマイナスのコメントがあったのは、通常、母語話者が挿入しない左枝分かれ境界(例えば「連体修飾語と被修飾語」など)でのポーズ出現がマイナス要因になったと推測できる。

これら3つの特徴がマイナス要因だと推測できる。

それでは、これらのポーズの時間長を聞きやすいと評価されたスピーチと同等に長く加工すれば、聴取者からは聞きやすくなったと評価されるのだろうか。第4章では、合成音声を使って聴取実験を行った。聞きにくいスピーチの文末、接続助詞、係助詞「は」、接続詞の後に十分な時間長のポーズを挿入し、連体修飾と被修飾語の間のポーズを削除した音声を作った(加工音声)。そして、元の音声と加工音声と、①聞きやすさ、②流暢さ、③上手さの点について比較する聴取実験を行った。その結果、「連体修飾と被修飾語の間」以外の項目で有意な差が見られた²。また、これらの各項目が全体を予測することも示唆された。

¹動詞、形容詞、コピュラを指す。第5章も参照。

² (1)文末、(6)接続詞、(7)全体の②流暢さでは有意差なし。他15項目では有意差あり。

以上、第4章の結果から、ポーズを加工すれば、聞きやすいスピーチだと評価されるようになることが示唆された。

第5章では、教育現場での指導で使うことを目的に、スピーチにおけるポーズの規範を試案として作成した。指導のためには規範があると効率的だ。例えば、東京方言アクセントには、一度アクセントが下がったら二度と上がらない、というような規範がある。ポーズについても出現位置と時間長について、同様の規範が必要である。まずは、現存する様々なルール(1.句読点、2.語類、3.南の分類、4.音読時のポーズ)とスピーチにおけるポーズの出現位置、時間長との関連性を探るため、比較分析した。だが、これら4つの中で、100%一致するものはなかった。そこで、スピーチにおける「ポーズの規範」試案の作成を試みた。その結果、

1. 述語的成分の後には、中央値程度～長いポーズ、または非常に長いポーズが出現する。但し「継起、条件」の意味を持つ発話節の後には、短いポーズが出現することもある。補足的成分の後には、短い～中央値程度のポーズが出現する。但し「並列」の意味を持つ発話節の後には、長いポーズが出現することもある。
2. 述語的成分の中で「言い切り」の場合は非常に長いポーズが出現する。
3. 補足的成分は、基本的に右枝分かれ境界で短いポーズが出現する(例外①～④³を除く)。それは「順接」、「逆接」、「取立」、「動詞修飾」の4つの意味的役割を持つ文節と一致することが多い。これらの文節の後には中央値程度～短いポーズが出現することが多い。そして、基本的に左枝分かれ境界ではポーズが出現しない(例外①～⑥⁴を除く)。但し、「並列」は左枝分かれ境界に該当することが多いが、ポーズの出現する頻度が高い。

という試案を作成した。

スピーチにおける「ポーズの規範」は出来たが、この規範は他の場面での談話—例えばプレゼンテーションやインタビューの応答—には適用されない可能性がある。第6章では、資料をプレゼンテーションに変えて「プレゼンテーションにおけるポーズの規範」の作成を試みた。研究方法は第5章と同じである。日本語母語話者に聞きやすいと評価された母

³ ①直前の発話節も右枝分かれ境界で、ポーズが出現している、②直後の発話節の後も右枝分かれ境界で、ポーズが出現している、③発話節が短い(ポーズなしで約15拍以内)、④左枝分かれ文での解釈が可能、という4つの条件下では、右枝分かれ境界でもポーズが出現しないことがある。

⁴ ①フォーカス語の前、②引用の「と」の前、③発話節が長い(ポーズを挿入しないと約30拍以上続く)、④述語的成分で終わる発話節、⑤右枝分かれ文での解釈が可能、⑥並列、という6つの条件下では、左枝分かれ境界でもポーズが出現することがある。

話者 2 名のプレゼンテーションと日本語学習者 1 名のプレゼンテーションを比較し、3 つの資料に共通するポーズの出現位置、時間長の特徴を分析した。その結果を記す。

1. 述語的成分の後には、中央値程度～長いポーズ、または非常に長いポーズが出現する。但し「継起」の意味を持つ発話節の後には、短いポーズが出現することもある。補足的成分の後には短い～中央値のポーズが出現する。但し「並列」の意味を持つ発話節の後には、長いポーズが出現することもある。
2. 述語的成分の中で、「話題転換」や「フォーカス語」の発話節の前では非常に長いポーズが出現する。
3. 補足的成分は、基本的に右枝分かれ境界で中央値程度～短いポーズが出現する(例外③⑦⁵を除く)。それは、「逆接」の意味的役割と一致することが多く、中央値程度～短いポーズが出現することが多い。「取立」「順接」「時間」「動詞修飾」は右枝分かれ境界に該当しても、ポーズは出現しないことが多い。一方、基本的に左枝分かれ境界ではポーズが出現しない(例外①②⑥⑦⁶を除く)。但し、「並列」は左枝分かれ境界だが、ポーズが出現することが多い。

第 5 章のスピーチにおけるポーズの規範と比較した結果、相違があった。つまり、スピーチもプレゼンテーションもどちらも同じ談話のカテゴリーに含まれるが、聞きやすいとされるポーズの出現位置、時間長の特徴は異なると言える。それは、両者の談話の目的が異なるからだと考える。つまり、プレゼンテーションでは、聴衆の様子を見ながら、話を先に進めたほうが良いと判断した場合は、右枝分かれ境界でもポーズを入れずに進行させるのだろう。

第 7 章では、資料をインタビューの応答に変えて、「インタビューにおけるポーズの規範」の作成を試みた。研究方法は第 5 章、第 6 章と同じである。母語話者 2 名のインタビューと母語話者に聞きやすいと評価された日本語学習者 1 名のインタビューの応答を比較し、3 つの資料に共通するポーズの出現位置、時間長の特徴を分析した。その結果、

1. 述語的成分の後には、中央値程度～長いポーズが出現することが多いが、短いポーズも頻出する。非常に長いポーズは出現しない。

⁵ ③発話節が短い(ポーズなしで 15～20 拍以内)、⑦直前、直後の発話節にポーズが出現しているという 2 つの条件下では、右枝分かれ境界でもポーズが出現しないことがある。

⁶ ①フォーカス語の前、②引用の「と」の前、⑥並列(特に助詞が省略され文節が並列するとき)、⑦取立の「って」の後、以上の条件下では、例外として左枝分かれ境界でもポーズが出現することがある。

2. 話者によっては、述語的成分の中で「言い切り」、「話題転換」、「フォーカス語」の前、「言いにくい内容」の前で長いポーズが出現することがある。
3. 補足的成分は、基本的に右枝分かれ境界で中央値程度～短いポーズが出現する。それは、「取立」の意味的役割と一致することが多い。但し、「動詞修飾、付加、場所、順接、逆接、時間、手段」の後は、例外③⑦⁷に該当することが多く、右枝分かれ境界でもポーズが出現しないことが多い。一方、基本的に左枝分かれ境界ではポーズが出現しない(例外①②⑧⁸を除く)。但し、「並列」は左枝分かれ境界だが、ポーズが出現することが多い。

この結果は、第5章のスピーチ、第6章のプレゼンテーションのポーズ規範とは異なる。つまり、場面によって期待される(聞きやすいと評価される)ポーズが異なるということが示唆された。特にインタビューでは、述語的成分の後でも非常に長いポーズを挿入することはない。これは、スピーチやプレゼンテーションのようにターンの保持が約束されていないことが関係していると考えられる。非常に長いポーズを避けることで、ターン交替をしないという意思表示をしているのではないかと推論する。つまり、スピーチ、プレゼンテーションの資料よりも、より談話として相手を意識した発話をしていると考えられる。

以上、3つの異なる場面での談話を発話資料に取り上げ、それぞれの場面でのポーズの特徴を分析し、「ポーズの規範」を試案として作成した。

最後に、第8章から第10章では、これらの規範は日本語教育の現場で有効に使えるかどうか検証することを目的に実験を行った。

まず、第8章ではスピーチのポーズ規範を使い、スピーチの指導を行った。指導時間は20分程度であり、これまでの発音指導に比べても、非常に短い時間で指導が済んでいることが、今回のポーズ指導の特徴であると言える。実験群の学習者3名(オランダ人、アメリカ人、香港人)に対し、指導前、指導後にそれぞれ異なるテーマでスピーチをしてもらい、それを資料とした。統制群の学習者2名(アメリカ人、フィリピン人)には指導を行わず、2回スピーチをしてもらい事前、事後の資料とした。

実験群の学生には、(1)述語的成分の後には長いポーズを入れる、(2)言い切りの時は非常に長いポーズを入れる、(3)「順接」「逆接」「並列」「取立」「動詞修飾」の後には短いポーズを入れる、と個別に指導した。前述したように指導時間が短いため、教師にも学習者にも大きな負担はないと言える。

⁷ ③発話節が短い(ポーズなしで40拍以内)、⑦直前、直後の発話節にポーズが出現している、以上の条件下では、例外として右枝分かれ境界でもポーズが出現しないことがある。

⁸ ①フォーカス語の前、②引用の「と」の前、および後、⑧考えている時、言いよんだ時、以上の条件下では、例外として左枝分かれ境界でもポーズが出現することがある。

母語話者約 30 名が指導前(統制群は事前)、指導後(統制群は事後)の発話者間の資料について、①聞きやすさ、②流暢さ、③上手さについて聴覚印象を比較してもらった。さらに、音響分析による比較も行った。

聴覚印象による比較の結果、実験群の学習者 3 名は、①～③のほぼ全ての項目で指導後のほうが有意に高くなった。一方統制群の学習者 2 名は、①～③のほぼ全ての項目で指導前・後に有意差はなかった。また、実験群は、指導後の方が聞きやすいというコメントがあった。さらに、ポーズが適切になったというコメントのみならず、速さ、イントネーション、単音、フィラーも適切になったというコメントがあった。

次に、ポーズと発話節の時間長について検定をしたところ、ポーズの時間長については有意な差がなかったが、発話節の時間長は 3 名中 2 名に有意傾向あるいは有意差があった。

最後にポーズの規範と照らし合わせ、ポーズの出現位置の変化について調べた。その結果、第一段階では、指導前から「述語的成分の後には中央値程度～長いポーズ、または非常に長いポーズを出現させ、補足的成分の後には短い～中央値程度のポーズを出現させる」ことができている学習者が 1 名いたが、2 名は、指導後に出来るようになってきている。第二段階の「言い切りの後には非常に長いポーズが出現する」という規範についても、指導前から発話できている学習者が 1 名いたが、2 名は指導後、言い切りの後にだけ、他の述語的成分よりも長いポーズを出現させることが出来るようになってきている。第三段階では、指導前は出現不要である左枝分かれ境界(対象、限定、場所)にポーズが出現していたが、指導後はポーズが出現しなくなった。

以上の結果、スピーチのポーズ規範を用いた指導は効果的であることが示唆された。

第 9 章では、第 8 章と同様の方法で「プレゼンテーションにおけるポーズの規範」を使って、指導の効果を確かめた。スピーチ同様、指導時間は 20 分程度であり、これまでの発音指導に比べても、非常に短い時間で指導が済んでいる。これは、発音指導の上で特筆すべき点であると言える。

実験群の学習者 2 名(中国人)が、指導前、指導後にそれぞれ異なるテーマでプレゼンテーションをした。その発話を資料とした。統制群の学習者 2 名(中国人)は、指導を受けず、2 回プレゼンテーションをした。1 回目を事前、2 回目を事後の資料とした。

実験群の学生には、(1)述語的成分の後には長いポーズを入れる、(2)話題が変わるとき、フォーカス語の前には非常に長いポーズを入れる、(3)「逆接」「並列」の後には短いポーズを入れる、と個別に指導した。スピーチ同様、指導時間が短いため、教師にも学習者にも大きな負担はない。

母語話者 30 名が指導前(統制群は事前)、指導後(統制群は事後)の発話者間の資料の①聞きやすさ、②流暢さ、③上手さについて、聴覚印象を比較した。さらに、音響分析による比較も行った。

聴覚印象による比較の結果、実験群の学習者 2 名は、①～③全ての項目で指導後のほうが有意に高くなった。一方、統制群の学習者 2 名は、ほぼ全ての項目で指導前・後に有意

差はなかった。また、実験群は、指導後の方が聞きやすいというコメントがあった。さらに、ポーズが適切になったというコメントのみならず、速さ、単音、フィラーも適切になったというコメントがあった。

また、音響分析による比較の結果、ポーズの時間長については1名のみ有意な差があり、発話節の時間長は2名とも有意差があった。

最後にポーズの規範と照らし合わせながら、ポーズの出現位置の変化について調べた。第一段階では、1名の学習者は、指導前から「述語的成分の後には中央値程度～長いポーズ、または非常に長いポーズを出現させ、補足的成分の後には短い～中央値程度のポーズを出現させる」ことができていた。もう1名は指導後に述語的成分の後、中央値程度～長いポーズ、または非常に長いポーズを挿入することが出来るようになっていた。第二段階の「話題転換」や「フォーカス語」の前には非常に長いポーズが出現する」という規範については、2名とも指導後に挿入することが出来るようになった。第三段階では、指導前は、出現が必要だと考えられている「逆接」「並列」の後にポーズが出現していなかったが、指導後はポーズが出現するようになった。但し、全てのポーズが規範通りに出現するようになったわけではなかった。左枝分かれ境界であるにもかかわらず、指導後もポーズが出現してしまった箇所(時間、限定)もあった。特に数字の読みは、学習者にとって難しい項目の一つであるため、その語の前後ではポーズを挿入してしまうケースがある。つまり、苦手意識のある箇所については一度の指導では期待される効果がなかったかもしれない。だが、全体的には1%水準で指導後のほうが高い評価だったことから、プレゼンテーションのポーズ規範を用いた指導は効果があることが示唆された。

第10章では、第8章、第9章と同様の方法で「インタビューにおけるポーズの規範」を使って、指導の効果を確かめた。

実験群の学習者2名(中国人、韓国人)が、指導前、指導後にそれぞれ異なるテーマでインタビューに答えた。その発話を資料とした。統制群の学習者2名(中国人、日本人)は、指導を行わず2回インタビューに答えた。1問目の発話を事前、2問目の発話を事後の資料とした。

実験群の学生には、(1)述語的成分の後には長めのポーズを入れる(非常に長いポーズは出現せず)、(2)「取立」「並列」の後には短いポーズを入れる、と個別に指導した。教師から学生に対する指導時間は5～10分程度である。スピーチやプレゼンテーションよりも短い時間で済んでおり、教師にも学習者にも負担が非常に少ない。

母語話者25～40名が指導前(統制群は事前)、指導後(統制群は事後)の発話者間の資料の①聞きやすさ、②流暢さ、③上手さについて、聴覚印象を比較した。さらに、音響分析による比較も行った。

聴覚印象による比較の結果、実験群の学習者2名は、①～③、ほぼ全ての項目で指導後のほうが有意に高くなった。一方、統制群の学習者2名は全ての項目で指導前・後に有意差はなかった。また、実験群は、指導後の方が聞きやすい、流暢になったというコメント

があった。さらに、ポーズが適切になったというコメントの他、フィラーが減り聞きやすくなったというコメントもあった。

また、音響分析による比較の結果、2名とも発話節の時間長については有意な差が見られなかったが、ポーズの時間長は有意傾向だった。

最後にポーズの規範と照らし合わせながら、ポーズの出現位置の変化について調べた。第一段階の「述語的成分の後でも、非常に長いポーズは出現しない」という規範は2名とも指導前から出来ていた。第二段階は、聞きやすいインタビューでも、人によって長いポーズの出現位置が異なるため、個々に考察をした。CKの指導後の資料は、第7章で扱った聞きやすい資料の一人(K1)と同様に、言い切りした後で長いポーズを入れるようになった。KYは話題転換の後に長いポーズを入れるようになった。第三段階では、指導前は出現が不要な左枝分かれ境界(限定、動詞修飾、対象、引用、場所)にポーズが出現していたが、指導後は左枝分かれ境界でのポーズの出現が減少した。また、指導前は文節の途中でポーズが出現している箇所もあったが、指導後はなくなった。但し、全てのポーズが規範通りに出現するようになったわけではなく、CKは、左枝分かれ境界であるにもかかわらず、指導後も依然ポーズが出現している箇所(限定、動詞修飾、対象)がある。KYは、指導後は出現不要な左枝分かれ境界の「場所」の後で、ポーズが出現しなくなった。

さらに、CKについてはフィラーが激減したことが聞きやすさに大きな影響を与えていることを加えたい。ターン保持のシグナルを示すフィラーは、頻出すると聴取者にマイナスの印象を与えると考えられる。その要因が取り除かれることで、全体の評価が上がったと言える。

以上のことからインタビューのポーズ規範を用いた指導は効果があることが示唆された。ここで、冒頭に掲げた3つの目的が明らかになったかを確認する。

<目的>

1. 日本語学習者が、日本語母語話者にとって聞きやすい談話(スピーチ、プレゼンテーション、インタビュー)を生成するための指標として、それぞれの「ポーズの規範」を作成すること。そして規範に基づいた指導効果を検証すること。
→ 3種類の談話の規範を、それぞれ試案として作成することが出来た。
2. 談話場面(スピーチ、プレゼンテーション、インタビュー)によってポーズの出現位置、時間長に差があるか、あるならどう異なるかを明らかにすること。
→ 規範の第一段階では、スピーチとプレゼンテーションに共通点があったが、インタビューは異なる特徴があった。第二段階、第三段階については、3種類それぞれ異なる特徴があった。
3. ポーズの出現位置と枝分かれ構造および各文節の意味的役割との関係を探ること。

→ 枝分かれ構造については、基本的に右枝分かれ境界でポーズが出現し、左枝分かれ境界ではポーズが出現していない。だが、右枝分かれ境界でもポーズが出現しない、あるいは左枝分かれ境界でもポーズが出現するという例外が多い。その例外は3つの資料(場面)で異なる。また、意味的役割については、ポーズが後続しやすい意味的役割、後続しにくい意味的役割というのはあるが、これも場面によって変わる。

3つの談話(スピーチ、プレゼンテーション、インタビュー)の音声指導の際、指標とすることが出来るよう、それぞれのポーズの出現位置と時間長を表にまとめた。

表1 談話別 ポーズの適切な位置と時間長

	非常に長いポーズ	長いポーズ	短いポーズ
スピーチ	言い切り	(左記以外の)動詞, 形容詞, ですの後	順接, 逆接, 並列, 取立, 動詞修飾の後
プレゼンテーション	話題転換, フォーカス語の前	(左記以外の)動詞, 形容詞, ですの後	逆接, 並列の後
インタビュー	出現なし	言い切り, 話題転換, フォーカス語の前	並列, 取立の後

今回、3つの談話のポーズについて分析をしたが、様々な相違点が見られた。これは、発話の目的の違いがもたらした相違だと言える。指導の際は、「独話」とひとくくりにするようなことはせず、どのような目的で話す談話なのか、そしてどのような発話が聴取者に評価されるのかということ、一つ一つ丁寧に考えながら行う必要がある。

今後の課題を3点あげる。

第一に、聞きやすいプレゼンテーション、聞きやすいインタビューの基準についてである。スピーチよりもプレゼンテーション、インタビューは基準に幅があると感じた。従って、各談話について聴取者側の持つ評価基準を明確にすることを課題にあげる。

第二に、構文構造とポーズの関連性を解明することである。本稿でも、意味的役割を基準に文節を分類することで、構文構造との関連性の解明に着手した。だが、3種類の談話を扱ったのみである。他の種類についても検討し、両者の関連性を研究することを課題にあげる。

第三に、ポーズの普遍性を検証することである。ターン保持が保証されている場面では、述語的成分の後のポーズは長い(あるいは非常に長い)というのは、どの言語かに関係なく、普遍的なものではないかと予測した。そして、補足的成分の後の短いポーズの出現位置と時間長は、言語固有のものではないかと書いた。どちらも現段階では予測の域を超えていない。これを解明するためには、日本語のみならず他の言語のポーズについても研究することが不可欠になる。まずは、構文構造が似ている韓国語、モンゴル語、トルコ語から始めると、日本語との比較がしやすいと考える。